

# 異文化間能力とグローバル体験学習プログラム —キャリア体験学習（国際・台湾）を事例として—

法政大学キャリアデザイン学部教授 松尾 知明

## 1 はじめに

グローバル社会のボーダレス化が進み、異なる文化との接触や交流は日常化している。一方で、コロナの流行で直面したように、地球規模の相互依存は深化しており、異なる人々との協働による問題解決に迫られている。地球の縮小化が進行し、文化的に異なる人々との相互の交流や依存が深まる今日、だれにでも育成が求められるようになったのが異文化間能力 (intercultural competence) である。ここで、異文化間能力とは、異なる文化と文化の間で効果的に機能することのできる力をいう。

国内においても、2018年の出入国管理及び難民認定法（以下、入管法）改定、そして令和の時代の始まりは、「移民時代」の到来を告げるものとなった。急速な少子高齢化に伴う労働力不足を背景とした入管法改定は、人手不足の職種にまで外国人労働者を受け入れるという大きな変更で、今後、さらに一層の外国人人口の増加が予想されている。海外のみならず日本での日々の生活においても外国人と共に生きる異文化間能力が必要な時代となったといえる。

しかし、日増しに重要度が高まっている異文化間能力をめぐっては、その育成に向けた取り組みはあまり進んでいない。例えば、日本の大学では、海外の現地研修や短期留学などを実施する機関は

増加しているが、その取り組みを異文化間能力の育成といった視点から検討し、その育成を図ろうとする試みはあまりみられない。異文化間能力に関する研究は、国際的には大きな進展がみられる一方で、日本においては直近の課題であるにもかかわらず、研究が進んでいない現状にある。

そこで、本稿では、キャリア体験学習（国際・台湾）を事例として、異文化間能力を育むグローバル体験学習プログラムをいかにデザインしていけばよいのかについて検討したい。以下、「2. 問題の所在と研究の目的」を提示した後、「3. プログラム設計の枠組みと手順」においてその基本的な考え方や進め方を検討し、「4. キャリア体験学習（国際・台湾）の事例」では、異文化間能力を育てるグローバル体験プログラムを具体的にデザインすることにした。

## 2 問題の所在と研究の目的

### (1) 研究の動向

異文化間能力に関する研究は、国際的には大きな進展がみられ、異文化間能力の(1) 定義、(2) 育成、(3) アセスメントなどの研究領域がある (Deardorff, 2015)。また、異文化間能力のハンドブック (Deardorff, 2009) や事典 (Bennett, 2015) も編纂されている。これらの研究から、実践上の課題としては、異文化間能力を定義して、

構成要素を同定し、それをもとにプログラムを開発したり、その能力を評価したりする際の手続きやプロセスの妥当性や信頼性の問題がある。また、プログラムやアセスメントの開発には、領域、アプローチ、文脈などに対応させて具体的に設計する必要があることが明らかになっている（松尾・森茂、2016）。

日本においては、グローバル体験学習についての関心は高まっている一方で（例えば、森茂・津山・村田、2016、子島・藤原、2007）、異文化間能力の育成に向けた研究はあまり進んでいない（松尾・森茂、2016）。海外の現地研修や短期留学などの実践は、異文化間能力研究にほとんど位置づけられておらず、理論的な枠組みやその育成状況の評価などの点で課題が残されている。

そこで小論では、異文化間能力の育成に焦点をあて、キャリア体験学習（国際・台湾）の事例をもとに、異文化間能力を育むグローバル体験学習の効果的なプログラム設計のあり方を検討するものである。

## (2) 異文化間能力を育てるグローバル体験学習の3つの課題

異文化間能力を育てるグローバル体験学習の検討にあたっては、以下の3つの課題に答える形で進めたい。

1つ目は、異文化間能力をいかに定義すればよいかという課題である。小論では、日本人性の概念を踏まえて異文化間能力を定義するとともに、その育成を判断するルーブリックを開発することでその精緻化を図りたい。なお、日本人性とは、後述するように、アメリカ合衆国の白人性研究に着想を得た概念で、日本人／非日本人（外国人）の差異のポリティックスによって形成されるもので、目に見えない文化実践、自分・他者・社会をみる見方、構造的な特権から構成されるものをいう（松尾、2005）。

2つ目は、グローバル体験学習のプログラムをどのようにデザインすればよいかという課題である。小論では、Wiggins & McTighe (2005)

の逆向き設計の枠組みを参考に、目標を設定し、その目標を達成した具体的な学生像をイメージして、そのような学生のパフォーマンスが実現できるように学習活動及び指導プログラムを構想していくことにする。

3つ目は、アセスメントの手法をどのようにすればよいかという課題である。本研究では、森茂・津山 (2018) を参考に「体験の言語化」（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター、2016）に着目するとともに、「日本人性の意識化」を試みたい。すなわち、体験したことを振り返って言葉として表現させるとともに、日本人としての自分自身とのかかわりの点から日本人性（日本人であること）について検討させたい。評価にあたっては、体験を振り返って文章化した学生の成果物としての質的なデータを、ルーブリックをもとに評価することにした。それらの評価結果から、学生の異文化間能力の変容やグローバル体験学習のプログラムの効果などについて検討することにする。

以上のように本稿では、これらの3つの課題に答えて、異文化間能力を育てるグローバル体験学習プログラムをいかにデザインしていくかについて考察することにする。

## 3 プログラム設計の枠組みと手順

### (1) 異文化間能力の定義と教育目標・内容

#### ① 異文化間能力の定義

異文化間能力は、異なる文化と文化の間で効果的に機能することのできる能力をいう（松尾・森茂、2016）。一方で、日本社会における多文化共生を進めていくという視点に立つと、日本人性を問うことが必要であるように思われる。日本人性とは、空気のように意識されないマジョリティのもつ目に見えない文化実践、自分や他者、社会をみる視点、構造的な特権のことをいう（松尾、2005）。別の言い方をすれば、認識にのぼらない日本人としての自文化中心主義的もの見方や考え方、生活の仕方、マジョリティとしての抑圧を

伴う優位性のことである。こうした「日本人であること」（日本人性）に由来する不可視な文化の前提は、平等で公正な多文化共生社会を築いていくのを阻む一つの要因となっている。そのため異文化間能力を定義する際には、不平等を生み出しているマジョリティのもつ日本人性の脱構築を図っていくのを考慮する必要がある。

日本人性の議論を踏まえた異文化間能力の定義をめぐっては、松尾(2019)において検討を加えた。そこでは、異文化間能力を、日本人性の議論を踏まえて、「自らの日本人性について意識化し内省的にその社会的意味を検討するとともに、異なる人々を尊重し効果的にコミュニケーションをとり多文化共生の実現に向けて協働する力」と定義した。また、日本人性に基づく異文化間能力の構成要素について、知識、スキル、態度の項目に従い、表1のように整理した。

表1 異文化間能力の構成要素

	構成要素		
	自文化	他文化	社会
知識			
スキル	批判的思考	コミュニケーション	傾聴
態度	思慮深さ	寛容・共感	主体的参画

出典 松尾 (2019)、p.106.

小論では、こうした異文化間能力の定義と構成要素を手がかりに、異文化間能力を評価するためのルーブリックを作成したい。

## ②教育目標・内容の設定

異文化間能力を育てる教育実践について、松尾(2019)では、前述の定義と構成要素を踏まえ、以下のような教育目標と教育内容を同定している。

### 教育目標

同心円的なパースペクティブに気づくとともに、多文化・グローバルなパースペクティブを働かせて、多文化共生をめぐる現代の諸

課題を空間や時間の軸を踏まえて追究することを通して、自己、他者、社会についての理解を深めるとともに、グローバル化する日本や地球という多文化社会に主体的に生きる市民としての資質・能力を育成することをめざす。

①政治・経済・社会・文化をめぐる概念や理論を手がかりに、自文化、他文化、社会についての理解を深めるとともに、多文化共生をめぐる現代の諸課題を空間や時間の軸を踏まえて理解する。

②現代の諸課題を追究する過程で、事象について批判的に思考したり、異なる文化の間で効果的にコミュニケーションをとったり、また、自分とは異なる立場や経験をもつ人々の話に傾聴したりする。

③異なる文化や人に対する判断留保や内省を含めた思慮深さ、人権感覚に裏打ちされた異なる人やその経験、文化に対する寛容や共感、多文化共生社会の形成に協働して主体的に参画していこうとする態度を涵養する。

### 教育内容

①国内外の自分とは異なる文化をもつ人々の経験や歴史、文化に関心を持ち、それらを理解し尊重しようとする。(概念：自己、他者、文化、多文化、社会、アイデンティティ)

②文化が異なるために起るコミュニケーション上の問題を理解するとともに、文化的に異なる人々と積極的に交流してコミュニケーションをとろうとする。(概念：異文化間コミュニケーション、傾聴)

③自文化を他文化との比較を通して学ぶことを通して、日本人性のもたらす自文化中心主義的な見方に気づく。(概念：日本人性、自文化中心主義)

④マジョリティとマイノリティから構成される多文化社会の構造や現実についての理解を深め、偏見や差別を自分自身の問題として考えようとする。(概念：マジョリティとマイ

ノリティ、偏見、差別、権力、人種主義)

⑤グローバル化が進む中で、もの、情報、人のボーダレスな相互関係や相互依存が深まっているグローバル社会について理解しようとする。(概念：グローバル化、ボーダレス化、移民、難民、経済格差)

⑥持続可能な社会をめざして、環境、人権、平和など地球的な諸課題について理解し、問題解決に取り組もうとする。(概念：持続可能な社会、環境、人権、平和、国連)

⑦多文化共生社会を築く市民をめざして、現代社会の課題について話し合い、主体的に行動しようとする。(概念：多文化共生、多文化主義、社会統合、市民、社会参画)

出典 松尾 (2019)、p.108-109.

グローバル体験学習プログラムの考える際においても、これらの目標と内容をベースに、それぞれのプログラムの文脈に即して重要だと思われるものを取捨選択して、具体的な目標と内容を設定することにした。

## (2) グローバル体験学習プログラムのデザイン

異文化間能力を育成するグローバル体験学習プログラムのデザインにあたっては、第一に、教育の目標や内容を設定することにする。設定にあたっては、前述した異文化間能力を育てる教育実践における教育目標と教育内容をベースに、それぞれのグローバル体験学習の文脈に即して具体化することにする。

第二に、教育目標を実現した学生像をイメージして、そのような学生のレベルに高められるように、次のような内容を含むグローバル体験学習のプログラムを構想する。

1) 自己変容を可能にするような質の高いグローバル体験をデザインする。知識・スキル・態度の教育目標について、ルーブリック (評価基準表)のおおむね満足の基準を満たしたレベルをクリアできるように、グローバル体験学習の効果的な学

習活動を構想する。

2) 事前学習ーグローバル体験学習ー事後学習をつなぐプログラムにする。事前学習での準備、現地での体験学習、事後学習での振り返りを関連づけてデザインする。

3) 海外の現地とオンラインで交流する活動を入れる。体験学習への意識づけとして事前学習、振り返りとしての事後学習のなかで、ゲストスピーカーに話をしてもらったり、現地の学生と交流したりする機会を設ける。

4) 自己ー日本ー現地 (海外) を意識的につなぐ場面を設定する。自分・日本人と台湾人の関係について比較したり、つながりを発見したりすることなどを通して、自分自身の日本人性について考察する。

## (3) グローバル体験学習のアセスメント

異文化間能力を育むためのグローバル体験学習プログラムのアセスメントについては第一に、教育目標の達成状況を把握するために、「体験の言語化」を行い、体験を通してどのような気づきがあったのかについての振り返りを文章化する。とくに、「日本人性の意識化」に焦点をあてて、学習活動において日本人としての自分との関係を問う機会をつくり、自分自身の日本人という意識について何がどう変わったのかについて内省的に考えさせ、体験の言語化をさせる。

第二に、学生の成果物について、いつ、だれが、何を、どのように評価するのかの評価計画を立てる。評価は、プログラムを経験した個々の学生の変容を捉える評価とともにグローバル体験学習のプログラム評価を行う。

第三に、学生の成果物の評価にあたっては、ルーブリックを活用する。ルーブリックの作成にあたっては、教育目標として具体化した知識・スキル・態度をもとに、プログラムの内容に即して評価基準を具体的に設定することにする。

第四に、カリキュラムマネジメントの視点をもつ。グローバル体験学習のプログラムとアセスメントを設計して、不断の見直しをする目的

で、プログラムの PLAN - DO - CHECK - ACTION (PDCA) のサイクルを回すようにする。プログラム評価の視点をもつことで、よりよい体験学習への改善をめざす。

以上のようなプログラム設計の枠組み (①教育目標・内容の設定、②グローバル体験学習のデザイン、③アセスメントのデザイン) のもとに、体験学習の具体的な内容や場所に応じて、グローバル体験学習のプログラムを具体的に開発する。

## 4 キャリア体験学習 (国際・台湾) の事例

### (1) キャリア体験学習 (国際・台湾) の目標と内容

では、具体的にどのようにグローバル体験学習をデザインしていけばよいのだろうか。ここでは、法政大学キャリアデザイン学部が 2018 年度より実施しているキャリア体験学習 (国際・台湾) プログラムを事例として検討したい。

このプログラムは、日本との関係が深い一方であまり理解の進んでいない台湾を事例として、グローバルな視野に立ってキャリアデザインについて考察することを目的としている。具体的には、①台湾の歴史や社会、文化、人々について学び、②中国語の初歩を学び、③台湾につながる人々や大学生と交流し、④台湾において現地研修やフィールドワークを実施することを通して、⑤多文化社会でキャリア (人生) をデザインすることについて考える。

このプログラムでは、台湾とはどのような場所か、台湾人とはいかなる人々か、台湾と日本とはどんな関係にあるのかなどの問いに答える形で、台湾についての知識を深める。さらに、台湾や台湾の人々、台湾と日本のつながりについて学んだことで、自分自身のキャリアデザインについての見方や考え方がどのように深まったり変化したりしたのかについても検討する。

まず、前述の教育の目標と内容をもとに、キャ

リア体験学習 (国際・台湾) プログラムの目標を以下のように設定する。

### キャリア体験学習 (国際・台湾) の教育目標

台湾や台湾の人々に焦点をあて、現地での体験学習を実施することで、同心円的なパースペクティブ (日本人性) に気づくとともに、多文化・グローバルなパースペクティブを働かせて、多文化共生とキャリアデザインの諸課題を空間や時間の軸を踏まえて追究する。このことを通して、日本人としての自己、台湾人の他者、台湾の社会や台湾と日本とのかわりについての理解を深めるとともに、グローバル化する台湾や日本、地球という多文化社会に主体的に生きる市民としての資質・能力を育成することをめざす。

①政治・経済・社会・文化をめぐる概念や理論を手がかりに、台湾、台湾とつながる日本、世界についての理解を深めるとともに、多文化共生をめぐる現代の諸課題を空間や時間の軸を踏まえて理解する。

②現代の諸課題を追究する過程で、台湾、台湾の人々、日本との関係について批判的に思考したり、台湾の人々と効果的にコミュニケーションをとったり、台湾の人々の話に傾聴したりする。

③台湾の人々やその経験、文化に対して、判断留保や内省を含めた思慮深さ、人権感覚に裏打ちされた寛容や共感を育み、多文化共生社会の形成に協働して主体的に参画していくとする態度を涵養する。

### キャリア体験学習 (国際・台湾) の教育内容

①自分とは異なる文化をもつ台湾の人々の経験や歴史、文化に関心をもち、それらを理解し尊重しようとする。(概念:自己、他者、文化、多文化、社会、アイデンティティ)

②文化が異なるために起るコミュニケーション上の問題を理解するとともに、文化的に異なる台湾の人々と積極的に交流してコミュニ

ケーションをとろうとする。(概念：異文化間コミュニケーション、傾聴)

③日本と台湾の文化や経験との比較から学ぶことで、日本人性のもたらす自文化中心主義的な見方や考え方に気づく。(概念：日本人性、自文化中心主義)

④マジョリティとマイノリティから構成される台湾の多文化社会の構造や現実についての理解を深め、偏見や差別を自分自身の問題として考えようとする。(概念：マジョリティとマイノリティ、偏見、差別、権力、人種主義)

⑤台湾や台湾と日本とのかかわりをもとに、グローバル化が進む中で、もの、情報、人のボーダレスな相互関係や相互依存が深まっているグローバル社会におけるキャリアデザインについて理解しようとする。(概念：グローバル化、ボーダレス化、移民、難民、経済格差)

⑥台湾や台湾と日本とのかかわりをもとに、持続可能な社会をめざして、環境、人権、平和など地球的な諸課題について理解し、問題解決に取り組もうとする。(概念：持続可能な社会、環境、人権、平和、国連)

⑦台湾や台湾と日本とのかかわりをもとに、多文化共生社会を築く市民をめざして、現代社会の課題について話し合い、主体的に行動しようとする。(概念：多文化共生、多文化主義、社会統合、市民、社会参画)

## (2) キャリア体験学習（国際・台湾）のカリキュラム

学習活動のデザインについては、目標を到達した学生をイメージして、そのような学生像が実現できるようにデザインする。キャリア体験学習（国際・台湾）の事例では、事前学習では、台湾についての概要を学び、現地との交流をもつことで、グローバル体験学習への準備を行う。現地の体験学習では、インターンシップ、フィールドワーク、元智大学の大学生や台湾校友会役員との交流を行う。事後学習は、国内フィールドワークを行いさらに台湾理解を深めるとともに、体験学習の

振り返りをしてポスターや報告書を作成することから、体験の言語化を図っていく。

### ①春学期・事前学習

春学期は、台湾の概要を知るために、地理・歴史、社会・文化、政治・経済、台湾人のアイデンティティなどについて調べ学習を中心にしながら追究する。また、台湾の元智大学の学生とオンラインで交流する。後半では、現地研修に向けて、インターン先の企業研究を行うとともに、しおりの作成を行う。中国語の学習は短時間であるが春学期を通して実施する。

1回のオリエンテーションでは、自己紹介を行い、キャリア体験学習（国際・台湾）の概要を知り、見通しをもつ。

2回から10回まで台湾事情についての調べ学習を進める。2回では台湾の概略と地理について理解するとともに、地理を意識しながら台湾旅行の企画を発表し合う。3回では、台湾の元智大学の大学生とオンラインで結び、大学や大学生活を紹介し合い交流する。4回では、台湾の歴史についての概略を捉えるとともに、日本統治時代、八田与一、霧社事件、国民党統治時代、憲法改正以降などについて調べてきたことを発表し合う。5回では、台湾の政治についての概略を捉えるとともに、国民党と民進党、蒋介石、李登輝政権、陳水扁政権、馬英九政権、蔡英文政権などについて調べてきたことを発表し合う。6回では、台湾の社会についての概略を捉えるとともに、原住民、新移民、本省人と外省人、女性、性的マイノリティなどについて調べてきたことを発表し合う。7回では、台湾の文化についての概略を捉えるとともに、映画、音楽、飲食文化、宗教、年中行事などについて調べてきたことを発表し合う。8回では、台湾のアイデンティティについての概略を捉えるとともに、元智大学の学生にインタビューした結果を発表し合う。9回では、台湾の経済についての概略を捉えるとともに、農業、工業、経済発展、TSMC、ホンハイ精密などについて調べてきたことを発表し合う。10回では、現地研修先について、

調べてきたことを発表し合う。

11回から13回までは、台湾について学んだことをまとめるとともに、現地研修に向けてしおりを作成する。11回では、しおりづくりの計画を立て役割分担を行う。12回では編集作業を行い、13回で最終チェックを行う。14回では、現地研究の直前チェックを行うとともに、研究成果発表会の準備をする。

## ②グローバル体験学習

台湾での体験学習は、8月に2週間、台北でのインターンシップ、台中、台南でのフィールドワーク、元智大学の学生や台湾校友会役員との交流などを行う。

1日目（木）は移動日で、2日目（金）にオリエンテーションを行う。3日目（土）と4日目（日）は、元智大学の学生との交流やインターンシップに向けた準備を行う。

5日目（月）から9日（金）までは、企業等でのインターンシップを行う。2019年度については、1) 台湾角川股份有限公司、2) 新北市協拍中心、3) 郭元益糕餅博物館、4) 日立先端科技股份有限公司、5) Pongddy Education、6) Horizonにおいて現地研修を実施した。

10日目（土）から12日目（月）までは、台中、台南への2泊3日のフィールドワークを行う。原住民の文化を知る九族文化村、烏龍茶、紅茶文化体験する埔里、日本とのかかわりを知る霧社、八田与一記念館、オランダ、明・清、日本との関係を知る台南などを訪れる。

13日目（火）には、成果報告・意見交換会を行う。元智大学の呉翠華先生、台湾校友会役員の方に講演をしていただく。学生は、体験学習の成果についてプレゼンを行う。14日目（水）は、移動日となる。

## ③秋学期・事後指導

秋学期は、現地体験学習の振り返りを行うとともに、日本のなかの台湾ということで横浜と東京でのフィールドワークを行う。また、まとめの活

動としてポスターと報告書の作成を行う。

1回では、秋学期の授業の見直しをもつとともに、7回にかけて、現地体験学習の振り返りを行う。企業研修、フィールドワーク、元智大学の学生との交流、元智大学の呉先生や台湾学友会役員のお話、台湾での生活についてなど、14日間で学んだ内容についての振り返りを行う。

4回と8回では、日本のなかの台湾と題してフィールドワークを行う。4回は、横浜フィールドワークを実施し、横浜中華学院にて建国記念の式典に参加するとともに、孫文ゆかりの中華街を散策する。5回は、横浜フィールドワークの振り返りを行う。また、8回は、東京フィールドワークを実施し、台北駐日経済文化代表処、台湾観光協会東京事務処、台湾文化センター、台湾慈濟日本分会などの機関を訪問し、台湾の文化に触れる。9回は、東京フィールドワークの振り返りをする。

2回から11回にかけて、現地体験学習の振り返りをするとともに、ポスターと報告書を作成して、まとめの活動を行う。2回は、ポスター・報告書づくりの計画、役割分担をする。3回では、ポスター・報告書づくりの工程表を作成する。その後、ポスター・報告書づくりということで、5回は、構成やレイアウト等の決定、6回は、ポスター・報告書の骨子の決定、7回と9回は、原稿の整理、10回と11回は、ポスター・報告書の印刷と校正を進める。12回のポスター・報告書の合評会①では、完成したポスター・報告書の成果と課題を検討する。13回の合評会②では、昨年メンバーに報告する。

14回では、キャリア体験学習（国際・台湾）のプログラム全体の振り返りを行う。

## (3) キャリア体験学習（国際・台湾）のアセスメント

アセスメントについては、グローバル体験学習プログラムの節目となるプログラムの開始時、事前学習の終了時、現地体験学習の終了時、プログラム終了時の4つの場面で実施する。

「体験の言語化」については、現地体験学習の

レポート、及び、ポスター・報告書をもとに、台湾についての理解がいかに深まったのか、台湾の人々と積極的に交流ができたのか、多文化共生の態度をどのくらい醸成できたのかを把握する。また、グローバル体験学習の最初と最後に、台湾のイメージについてのコラージュを作成させる。体験学習プログラムを通して、何がどのように変容したのかを捉える。また、評価結果を統合して、プログラム評価を実施する。

評価にあたっては、ルーブリックを活用する。

教育の目標と内容を踏まえ、グローバル体験学習プログラムを通して実現したい学生像のイメージを想像して、ルーブリックをできるだけ具体的に設定する。本事例では、ルーブリックは、知識、スキル、態度の3つの観点と、基準を十分に満たしている、おおむね基準を満たしている、基準に近づいている、努力を要する、の4つのレベルを設定する。設定したルーブリックは、表2の通りである。

### キャリア体験学習（国際・台湾）

#### <春学期・事前指導>

- 1回 オリエンテーション 自己紹介 概要説明
- 2回 台湾事情① 台湾の地理：台湾を旅行するとしたら 中国語学習 ①
- 3回 台湾事情② 台湾の大学生：元智大学学生との交流 中国語学習 ②
- 4回 台湾事情③ 台湾の歴史：台湾史の概要とは 中国語学習 ③
- 5回 台湾事情④ 台湾の政治：台湾の政治を知ろう 中国語学習 ④
- 6回 台湾事情⑤ 台湾の社会：台湾の社会を知ろう 中国語学習 ⑤
- 7回 台湾事情⑥ 台湾の文化：台湾の文化を知ろう 中国語学習 ⑥
- 8回 台湾事情⑦ 台湾人のアイデンティティ： 中国語学習 ⑦
- 9回 台湾事情⑧ 台湾の経済：台湾の経済を知ろう 中国語学習 ⑧
- 10回 台湾事情⑨ 台湾の現地研修：インターン企業を知ろう 中国語学習 ⑨
- 11回 研修プログラムに向けて① しおり作成① 中国語学習 ⑩
- 12回 研修プログラムに向けて② しおり作成② 中国語学習 ⑪
- 13回 研修プログラムに向けて③ しおり作成③ 中国語学習 ⑫
- 14回 秋学期のまとめ 直前チェック 現地の成果発表会の準備

#### <グローバル体験学習>

- 1日目（木）移動
- 2日目（金）オリエンテーション
- 3日目（土）、4日目（日）大学生との交流、インターンシップの準備
- 5日目（月）～9日（金）台北での企業等インターンシップ
- 10日目（土）～12日目（月）台中・台南フィールドワーク
- 13日目（火）成果報告・意見交換会
- 14日目（水）移動

#### <秋学期・事後指導>

- 1回 オリエンテーション 現地体験学習の振り返り①
- 2回 現地体験学習の振り返り②、ポスター・報告書づくりの計画①役割分担
- 3回 現地体験学習の振り返り③、ポスター・報告書づくりの計画②工程表の作成



- 4回 横浜フィールドワーク  
 5回 フィールドワークの振り返り、ポスター・報告書づくり①構成やレイアウト等の決定  
 6回 現地体験学習の振り返り④、ポスター・報告書づくり②骨子の決定  
 7回 現地体験学習の振り返り⑤、ポスター・報告書づくり③原稿の整理  
 8回 東京フィールドワーク  
 9回 フィールドワークの振り返り、ポスター・報告書づくり④原稿の整理  
 10回 ポスター・報告書づくり⑤印刷と校正  
 11回 ポスター・報告書づくり⑥印刷と校正  
 12回 ポスター・報告書の合評会①完成したポスター・報告書の成果と課題  
 13回 ポスター・報告書の合評会②昨年度のメンバーへの報告  
 14回 プログラム全体の振り返り 春学期、秋学期のまとめ

表2 ルーブリック

	十分に基準を満す	おおむね基準を満す	基準に近づいている	努力を要する
知識	歴史的（時間）認識・地理的（空間）認識に立って、政治・経済・社会・文化の視点から、台湾、台湾とつながる日本、世界について、また、多文化共生をめぐる現代の諸課題について十分な知識をもっている。	歴史的（時間）認識・地理的（空間）認識に立って、政治・経済・社会・文化の視点から、台湾、台湾とつながる日本、世界について、また、多文化共生をめぐる現代の諸課題についてある程度の知識をもっている。	歴史的（時間）認識・地理的（空間）認識に立って、政治・経済・社会・文化の視点から、台湾、台湾とつながる日本、世界について、また、多文化共生をめぐる現代の諸課題について知識が増えてきている。	歴史的（時間）認識・地理的（空間）認識に立って、政治・経済・社会・文化の視点から、台湾、台湾とつながる日本、世界について、また、多文化共生をめぐる現代の諸課題についての知識をあまりもっていない。
スキル	現代の諸課題を追究する過程で、台湾、台湾の人々、日本との関係について批判的に思考したり、台湾の人々と効果的にコミュニケーションをとったり、台湾の人々の話に傾聴したりすることが十分にできている。	現代の諸課題を追究する過程で、台湾、台湾の人々、日本との関係について批判的に思考したり、台湾の人々と効果的にコミュニケーションをとったり、台湾の人々の話に傾聴したりすることがある程度できている。	現代の諸課題を追究する過程で、台湾、台湾の人々、日本との関係について批判的に思考したり、台湾の人々と効果的にコミュニケーションをとったり、台湾の人々の話に傾聴したりすることが少しでき始めてきている。	現代の諸課題を追究する過程で、台湾、台湾の人々、日本との関係について批判的に思考したり、台湾の人々と効果的にコミュニケーションをとったり、台湾の人々の話に傾聴したりすることがあまりできていない。
態度	台湾の人々やその経験、文化に対して、判断留保や内省を含めた思慮深さ、人権感覚に裏打ちされた寛容や共感、多文化共生社会の形成に協働して主体的に参画していこうとする態度を十分にもっている。	台湾の人々やその経験、文化に対して、判断留保や内省を含めた思慮深さ、人権感覚に裏打ちされた寛容や共感、多文化共生社会の形成に協働して主体的に参画していこうとする態度をある程度もっている。	台湾の人々やその経験、文化に対して、判断留保や内省を含めた思慮深さ、人権感覚に裏打ちされた寛容や共感、多文化共生社会の形成に協働して主体的に参画していこうとする態度が少しもてるようになってきている。	台湾の人々やその経験、文化に対して、判断留保や内省を含めた思慮深さ、人権感覚に裏打ちされた寛容や共感、多文化共生社会の形成に協働して主体的に参画していこうとする態度をあまりもっていない。

## 5 おわりに

コロナの蔓延は地球が1つの運命共同体であることを実感させる出来事であったが、ボーダレス化が進むなかでグローバル人材の育成が急務となっている。一方で、日本の現実をみていると、2018年の入管法の改定により外国人の流入はさらに進み、日本はこれから大きく多文化化していくと予想されている。グローバル化が加速するなかで、国の内外の多文化社会を生き抜く異文化間能力の育成が求められている。そこで小論では、学生が大きな変容を遂げることが期待される海外での現地研修に焦点をあて、異文化間能力を育むグローバル体験学習プログラムのあり方・進め方を具体的に検討してきた。

本稿では第一に、グローバル体験学習プログラムをデザインする基本的な枠組みと手順を以下のように提示した。①松尾(2019)で検討した異文化間能力の定義および教育の目標と方法をベースとして、プログラム設計の要となる目標と内容を具体的な文脈に即して設定する。②グローバル体験学習の構想にあたっては、目標を到達した学生をイメージして、そのような学生像が実現できるように事前学習、海外での現地体験学習、事後学習をデザインする。内容には、現地とのオンライン交流を含め、自己-日本-現地(海外)、事前-体験-事後の学習をつなぐ。③「体験の言語化」と「日本人性の意識化」に着目して、評価計画を立てる。その際、学習活動の節目で体験を言語化する学生の成果物を収集し、知識・スキル・態度の観点をもつルーブリックをもとに評価をして、異文化間能力の視点から個人の変容やプログラムの成果と課題を捉えることにする。

第二に、キャリア体験学習(国際・台湾)を事例として、前述のプログラムをデザインする枠組みと手順をいかに具体化していくのかを例示した。前述の①②③を踏まえ、事例では、事前学習において、台湾についての理解を深めるとともに、現地体験学習への意欲を高めるために元智大学の学生とオンライン交流の活動を実施する。体験学

習では、台湾の現地において、インターンシップ、フィールドワーク、元智大学の大学生や台湾校友会役員との交流といった活動を行う。事後学習では、台湾を知る国内フィールドワークをして理解をさらに深めるとともに、体験の言語化を図っていくために、グローバル体験学習のプログラム全体を振り返り、ポスターや報告書を作成する。以上のように、台湾を事例としたプログラムの計画を立案した。

このように本稿では、異文化間能力の視点から、グローバル体験学習のデザインの考え方や進め方について検討してきた。本提案は、グローバル体験学習についての理論と実践を基礎づける枠組みと手順を提示した点で意義をもつと思われる。しかし、小論は、プログラムやアセスメントの検討が計画レベルにとどまっており、プログラムを実施して、その成果と課題を明らかにするまでには至っていない。グローバル体験学習プログラムを実際に動かしてPDCAのサイクルを回し、プログラムの改善を図っていくとともに、データをもとに異文化間能力を育てる効果的なグローバル体験学習のあり方について検討していくことが今後の課題として残されている。

### 参考文献または引用文献

- 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター編(2016)『体験の言語化』成文社。
- 子島進・藤原孝章編(2007)『大学における海外体験学習の挑戦』ナカニシヤ出版。
- 松尾知明(2005)「『ホワイテネス研究』と『日本人性』—異文化間教育研究への新しい視座」異文化間教育学会編『異文化間教育』第22号、アカデミア出版会、pp.15-26。
- 松尾知明(2019)「多文化教育と白人性—異文化間能力の育成に向けて」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』Vol.16、103-113頁。
- 松尾知明・森茂岳雄(2016)「異文化間能力を考える—多様な視点から」異文化間教育学会編『異文化間教育』第45号、pp.19-33。

- 松尾知明・森茂岳雄・工藤和宏 (2018) 「異文化間能力を生かす—実践に向けて」異文化間教育学会編『異文化間教育』第46号、pp.1-15.
- 森茂岳雄・津山直樹 (2016) 「ハワイ日本人移民の教材づくりに関する海外スタディツアーの教育的意義—物語論的アプローチによる大学生の自己変容プロセスの分析を通して—」『JICA 横浜海外移住資料館研究紀要』10、25-40 頁.
- 森茂岳雄・津山直樹・村田晶子編 (2016) 『大学における多文化体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版.
- Bennett, J. M. (Ed.) (2015) *The Sage Encyclopedia of Intercultural Competence*, Sage Publications.
- Deardorff, D. K. (Ed.) (2009). *The SAGE Handbook of Intercultural Competence*, Sage Publications.
- Deardorff, D. K. (2015). Intercultural Competence: Mapping the Future Research Agenda, *International Journal of Intercultural Relations* 48, pp.3-5
- Fatini, A. E. (2009). Assessing Intercultural Competence: Issues and Tools, In D. K. Deardorff (Ed.), *The SAGE Handbook of Intercultural Competence*, Sage Publications, pp.456-476.
- Frankenberg, R. (1993) *White Women, Race Matters: The Social Construction of Whiteness*, University of Minnesota Press.
- Wiggins, G., & McTighe, J. (2005). *Understanding by Design (expanded 2nd edition)*, Alexandria, VA: ASCD.

---

# Intercultural Competence and Global Experiential Studies: Designing Taiwanese Career Experiential Studies

MATSUO Tomoaki

---

Due to the advancement of globalization, realizing a way to develop intercultural competence becomes a significant issue in order to function effectively in a multicultural society. Using Taiwanese career experiential studies, this paper aims to explore how global experiential studies can be designed to enhance intercultural competence.

First, a framework of global experiential studies is articulated by three steps: preparation, experience, and reflection. The purposes, curriculum and evaluations of the studies are briefly discussed by examining three major questions: how to define intercultural competence, how to design global experiential studies, and how to assess intercultural competence. Then, the framework and procedure of planning global experiential studies are presented as a template.

Secondly, based on the framework, Taiwanese career experiential studies are designed in order to develop intercultural

competence. Preparation for the Spring Semester consists of (1) understanding Taiwanese history, society, culture and people, (2) learning some basic Chinese, and (3) meeting and interacting with Taiwanese people and college students. Taiwanese experiential studies, to be done, during a summer session, include (1) internships at Taiwanese companies, (2) fieldwork in the central and southern parts of Taiwan, and (3) interacting with Taiwanese college students and Hosei graduates. Reflection in the Fall Semester is composed of (1) looking back at what was learnt in the Taiwanese career experiential studies, (2) making a poster and a report on the studies and (3) considering the meaning of career design in a global and multicultural society.

Lastly, further research on the global experiential studies is suggested in terms of evaluating data of the participants after implementation of the studies.